

授業科目	関係法規	担当教員	北風 祐子		
対象年次・学期	3年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	10回	時間数	20時間
授業目的	言語聴覚士に係る法律について学ぶ。				
到達目標	① 言語聴覚士として必要な法規について理解する。 ② 言語聴覚士と関係の深い職種について知識を得る。				
テキスト・参考図書等	(教) 言語聴覚士テキスト 第3版 著者名：大森孝一他 発行所：医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験により評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	欠席せず、予習復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	関係職種と法規	リハビリテーション領域のなかの言語聴覚士法		
	2	関係職種と法規	言語聴覚士法		
	3	関係職種と法規	言語聴覚士法		
	4	関係職種と法規	医事法規(1)医療法		
	5	関係職種と法規	医事法規(2)医師法、歯科医師法(3)保健師助産師看護師法		
	6	関係職種と法規	関係職種(1)社会福祉士・介護福祉士		
	7	関係職種と法規	関係職種(2)特別支援教育		
	8	関係職種と法規	関係職種(3)特別支援教育		
	9	関係職種と法規	その他(1)法の体系、個人情報保護法		
10	関係職種と法規	その他(2)法の体系、個人情報保護法			

授業科目	言語聴覚障害診断学Ⅱ	担当教員	北風 祐子		
対象年次・学期	3年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	言語聴覚障害学について学習し、評価の方法や援助技術について確認し、実施できる。				
到達目標	言語聴覚障害について系統立てて、考えることができる。 ① 評価・診断の理念 ② 評価・診断の過程 ③ 統合・解釈				
テキスト・参考図書等	図解 やさしくわかる言語聴覚障害 著者名：小嶋 智幸 発行所：ナツメ社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	定期試験（実技試験）、提出物（解説作成）で評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	50			
その他	0				
履修上の留意事項	欠席しないこと。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	検査演習	実習前オリエンテーション（臨床実習手引き説明含む）		
	2	検査演習	検査演習（成人・小児）		
	3	検査演習	検査演習（成人・小児）		
	4	検査演習	検査演習（成人・小児）		
	5	検査演習	検査演習（成人・小児）		
	6	検査演習	検査演習（成人・小児）		
	7	国家試験対策	検査演習（成人・小児）		
	8	国家試験対策	模擬試験実施（200問）		
	9	国家試験対策	模擬試験問題解説作り（グループワーク）		
	10	国家試験対策	解説発表		
	11	国家試験対策	解説発表		
	12	報告書、計画書作成	臨床実習に関わる評価の報告書作成練習、訓練目標等、ICFに基づく計画書作成練習		
	13	報告書、計画書作成	臨床実習に関わる評価の報告書作成練習、訓練目標等、ICFに基づく計画書作成練習		
	14	報告書、計画書作成	臨床実習に関わる評価の報告書作成練習、訓練目標等、ICFに基づく計画書作成練習		
15	臨床実習および実技試験対策	実技試験概要説明			

授業科目	言語聴覚障害特論Ⅰ		担当教員	北風 祐子	
対象年次・学期	3年・通年		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	30回	時間数 60時間
授業目的	<ul style="list-style-type: none"> ・言語聴覚療法に必要な評価の主義を学ぶ ・国家試験の過去の出題や模擬試験を基に、専門基礎分野、専門分野の問題を解いて知識の確認を行う。 				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ学習を通して効果的な学習理解を進める。 				
テキスト・参考図書等	言語聴覚士国家試験 過去問題 著者名：言語聴覚士国家試験対策委員会 出版社：大揚社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	模擬試験および提出物にて評価を行う		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	50			
その他	0				
履修上の留意事項	資料の整理、問題の解き方、ノートやメモの作り方などを決めて計画的に進める。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	コミュニケーションの評価	CADL 実用コミュニケーション能力検査の構成について		
	2	コミュニケーションの評価	CADL 実用コミュニケーション能力検査の構成について		
	3	コミュニケーションの評価	CADL 実用コミュニケーション能力検査の統合と解釈について		
	4	コミュニケーションの評価	CADL 実用コミュニケーション能力検査の統合と解釈について		
	5	コミュニケーションの評価	CADL 実用コミュニケーション能力検査の統合と解釈について		
	6	コミュニケーションの評価	CADL 実用コミュニケーション能力検査の統合と解釈について		
	7	分野別国試対策	分野ごとの頻出ポイントの振り返り		
	8	分野別国試対策	分野ごとの頻出ポイントの振り返り		
	9	分野別国試対策	分野ごとの頻出ポイントの振り返り		
	10	分野別国試対策	分野ごとの頻出ポイントの振り返り		
	11	分野別国試対策	分野ごとの頻出ポイントの振り返り		
	12	分野別国試対策	分野ごとの頻出ポイントの振り返り		
	13	分野別国試対策	分野ごとの頻出ポイントの振り返り		
	14	分野別国試対策	分野ごとの頻出ポイントの振り返り		
	15	分野別国試対策	分野ごとの頻出ポイントの振り返り		
	16	模擬試験(1)	模擬試験(1)		
	17	模擬試験(1)	模擬試験(1)		
	18	グループ学習	模擬試験(1)の内容を中心としてグループ学習を行う。		
	19	グループ学習	模擬試験(1)の内容を中心としてグループ学習を行う。		
	20	模擬試験(2)	模擬試験(2)		
	21	模擬試験(2)	模擬試験(2)		
22	グループ学習	模擬試験(2)の内容を中心としてグループ学習を行う。			

23	グループ学習	模擬試験(2)の内容を中心としてグループ学習を行う。
24	模擬試験(3)	模擬試験(3)
25	模擬試験(3)	模擬試験(3)
26	グループ学習	模擬試験(3)の内容を中心としてグループ学習を行う。
27	グループ学習	模擬試験(3)の内容を中心としてグループ学習を行う。
28	プリント課題・口頭試問	プリント課題・口頭試問の実施
29	プリント課題・口頭試問	プリント課題・口頭試問の実施
30	プリント課題・口頭試問	プリント課題・口頭試問の実施

授業科目	言語聴覚障害特論Ⅱ	担当教員	北風 祐子		
対象年次・学期	3年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	・言語聴覚士国家試験の概要を理解する。				
到達目標	・国家試験の過去の出題や模擬試験を基に、専門基礎分野の問題を解いて知識の確認を行う。 ・グループ学習を通して効果的な学習理解を進める。				
テキスト・参考図書等	言語聴覚士国家試験 過去問題 著者名：言語聴覚士国家試験対策委員会 発行所：大揚社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	50	模擬試験・提出物を合わせて評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	50			
その他	0				
履修上の留意事項	資料の整理、問題の解き方、ノートやメモの作り方などを決めて計画的に進める。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	グループ学習	専門基礎科目を中心としてグループ学習を行う。 プリント課題の実施		
	2	グループ学習	専門基礎科目を中心としてグループ学習を行う。 プリント課題の実施		
	3	グループ学習	専門基礎科目を中心としてグループ学習を行う。 プリント課題の実施		
	4	グループ学習	専門基礎科目を中心としてグループ学習を行う。 プリント課題の実施		
	5	グループ学習	専門基礎科目を中心としてグループ学習を行う。 プリント課題の実施		
	6	グループ学習	専門基礎科目を中心としてグループ学習を行う。 プリント課題の実施		
	7	グループ学習	専門基礎科目を中心としてグループ学習を行う。 プリント課題の実施		
	8	グループ学習	専門基礎科目を中心としてグループ学習を行う。 プリント課題の実施		
	9	グループ学習	専門基礎科目を中心としてグループ学習を行う。 プリント課題の実施		
	10	模擬試験	模擬試験（専門基礎分野）を実施する。		
	11	模擬試験	模擬試験（専門基礎分野）を実施する。		
	12	模擬試験	模擬試験（専門基礎分野）を実施する。		
	13	模擬試験	模擬試験（専門基礎分野）を実施する。		
	14	模擬試験	模擬試験（専門基礎分野）を実施する。		
15	模擬試験	模擬試験（専門基礎分野）を実施する。			

授業科目	言語聴覚障害特論Ⅲ	担当教員	北風 祐子		
対象年次・学期	3年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	国家試験合格へ向けた総合的な学習を進める。単に国家試験合格を目的にするのではなく、これまで学んできた内容を復習し、今後の臨床活動に結び付けられる理解の機会とする。模擬試験を通して自己の課題分析を行い、個々の学習内容や方法を進めていく。				
到達目標	一般臨床医学、ST専門分野において国家試験レベルの60%以上（＝国家試験合格水準以上）の知識・理解を有するようになる。				
テキスト・参考図書等	全国模擬試験 プリント課題 全国リハビリテーション学校協会				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	試験の結果を踏まえ評価を行う。		
	レポート				
	小テスト				
	提出物				
その他					
履修上の留意事項	4年間の総復習となるため、学習範囲が広く復習を繰り返すことが多くなる。疑問は溜めこまず、その場で解消することが極めて重要である。しっかりと学習すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	【1～15回】 国家試験対策、模擬試験	国家試験対策として共通分野と専門分野の内容を学ぶ。 国家試験に準じた内容の模擬試験		

授業科目	言語発達障害演習Ⅱ	担当教員	佐々木 勇輝		
対象年次・学期	3年・通年	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	発達検査の実施を通し、臨床で活用できるようにする。小児分野の国家試験問題を解けるようになる。				
到達目標	① 知能検査、発達検査の目的と方法について説明でき、実施できる ② 国家試験問題が解けるようになる。				
テキスト・参考図書等	(参) 国リハ式<S-S法> 言語発達遅滞検査マニュアル改訂第4版 著者名：小寺富子 発行所：エスコアール (参) 言語聴覚士のための臨床実習（小児編） 著者名：深浦順一 発行所：建帛社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験で評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	欠席しないこと。 小児実習の関係で、検査の順番が入れ替わる可能性あり。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	知能・発達検査	概要理解、検査の実施		
	2	発達検査	概要理解、検査の実施		
	3	訓練	概要理解、訓練の実施		
	4	知能検査（田中ビネー知能検査Ⅴ、WISC-Ⅳ、WPPSI-Ⅲ等）	検査の実施		
	5	知能検査（田中ビネー知能検査Ⅴ、WISC-Ⅳ、WPPSI-Ⅲ等）	検査の実施		
	6	知能検査（田中ビネー知能検査Ⅴ、WISC-4、WPPSI-Ⅲ等）	検査の実施		
	7	認知機能検査（K-ABCⅡ、DN-CAS等）	検査の実施		
	8	認知機能検査（K-ABCⅡ、DN-CAS等）	検査の実施		
	9	言語発達検査（PVT-R、LCスケール等）	検査の実施		
	10	自閉症スペクトラム障害の検査（CARS、FOSCOM、ADI-R、ADS-2、M-CHAT、PEP-3、PARS-TR）	検査の実施		
	11	自閉症スペクトラム障害の検査（CARS、FOSCOM、ADI-R、ADS-2、M-CHAT、PEP-3、PARS-TR）	検査の実施		
	12	読み書き障害の検査（STRAW-R、LDI-R、URAWSS）	検査の実施		
	13	事例検討	事例を用いて、結果について考察する		
	14	事例検討	事例を用いて、結果について考察する		
15	事例検討	事例を用いて、結果について考察する			

授業科目	構音障害Ⅲ	担当教員	阿部 由美		
対象年次・学期	3年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	運動障害性構音障害の評価結果の解釈の仕方、具体的なリハビリテーションの実施方法を学ぶ。				
到達目標	運動障害性構音障害の評価結果の解釈ができる。具体的なリハビリテーションが実施できる				
テキスト・参考図書等	言語聴覚士のための運動障害性構音障害				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80	定期試験、小テスト、提出物を合わせて評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	10			
	提出物	10			
その他	0				
履修上の留意事項	欠席せず、予習復習をすること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	Dysarthriaのタイプ分類と疾患			
	2	Dysarthriaの評価法の実際	SLTA-STを振り返る		
	3	Dysarthriaの評価法の実際	AMSDを振り返る		
	4	Dysarthriaの評価法の実際	AMSDを振り返る		
	5	ことばと音の評価	GRBS尺度について/プロソディについて		
	6	評価結果の解釈から実際の訓練を考える	考え方・訓練立案・方法の説明		
	7	評価結果の解釈から実際の訓練を考える	訓練の実際（グループワーク）		
	8	評価結果の解釈から実際の訓練を考える	訓練の実際（グループワーク）		
	9	評価結果の解釈から実際の訓練を考える	訓練の実際（グループワーク）		
	10	治療とリハビリテーション	リハビリテーションの流れ		
	11	チームアプローチ	リハビリテーションの中の言語聴覚療法		
	12	AAC	種類と適応基準、STとしての役割		
	13	AAC	種類と適応基準、STとしての役割		
	14	症例検討	ペーパーペイシェントから見る言語聴覚療法の実際		
15	症例検討	ペーパーペイシェントから見る言語聴覚療法の実際			

授業科目	高次脳機能障害演習Ⅱ	担当教員	北風 祐子		
対象年次・学期	3年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	臨床実習に向けて、高次脳機能障害の検査を学ぶ				
到達目標	事例を通して適切な検査の選択、実施、結果の統合解釈、問題点抽出、目標設定、リハビリプログラムの立案、報告書の作成ができるようになる。				
テキスト・参考図書等	(教) 標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学 第2版 発行所：医学書院 (参) 高次脳機能障害ポケットマニュアル 著者名：原寛美監修 発行所：医歯薬出版株式会社				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	60	・試験(筆記40:実技20)・提出物を合わせて評価する。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	40			
その他	0				
履修上の留意事項	検査が多岐にわたるため、それぞれ手技や内容をしっかり復習し慣れておくこと 検査動画の供覧も実施する				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	知能検査	WAIS-III		
	2	知能検査	WAIS-III		
	3	知能検査	WAIS-III		
	4	知能検査	WAIS-III		
	5	記憶検査	WMS-R、リバーミード、レイの複雑図形、三宅式(S-PA)		
	6	記憶検査	WMS-R、リバーミード、レイの複雑図形、三宅式(S-PA)		
	7	注意検査	CAT、かなひろいテスト、Stroopテスト、TMT		
	8	注意検査	CAT、かなひろいテスト、Stroopテスト、TMT		
	9	遂行機能検査	FAB、BADs		
	10	遂行機能検査	FAB、BADs		
	11	無視検査	BIT		
	12	無視検査	BIT		
	13	失行・失認検査	SPTA、VPTA		
	14	事例検討	事例を通し、検査の選択、症状の把握の練習と評価報告書作成の練習を行う。		
15	事例検討	事例を通し、検査の選択、症状の把握の練習と評価報告書作成の練習を行う。			

授業科目	社会保障制度		担当教員	中村 さやか	
対象年次・学期	3年・後期		必修・選択区分	必修	単位数
授業形態			授業回数	15回	時間数 30時間
授業目的	我が国の社会福祉の状況を知りながら、社会保障のしくみや制度を理解し学び、専門職に必要な知識を持てるようにする。				
到達目標	・社会保障制度の役割や体系を理解する ・社会福祉の概要を対象者別に理解する ・援助技術について学び体験してみる				
テキスト・参考図書等	(教) ナーシング・グラフィカ 健康支援と社会保障③ 社会福祉と社会保障、増田雅暢・島田美喜・平野かよ子 編、株式会社メディカ出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験にて評価を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	社会人として、専門職として必要な事項について学ぶ。わからないことは授業の中で理解ができるよう質問すること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	社会保障と社会福祉	社会保障の体系や社会福祉の概要		
	2	現代社会の状況	社会保障、社会福祉の歴史的経過や現代社会の状況など		
	3	社会保障のしくみ	関連法律や実施体制について		
	4	社会保障①医療	医療保障の役割や医療保険制度		
	5	社会保障②年金	年金制度の役割や仕組み		
	6	社会保障③介護	介護保険の仕組みや内容		
	7	社会保障④労働	労働者に関わる保険制度など		
	8	公的扶助・手当	生活保護や各種手当について		
	9	社会福祉①障がい	障がいの理解や人権について		
	10	社会福祉②障がい	障がいに関する制度や法律、状況		
	11	社会福祉③児童	児童に関わる制度や法律		
	12	社会福祉④高齢	高齢に関する制度や法律		
	13	援助技術①	援助技術の種類や方法について		
	14	援助技術②	対人援助技術の演習		
15	援助技術②	対人援助技術の演習			

授業科目	摂食嚥下障害演習Ⅱ	担当教員	松山 大輔		
対象年次・学期	3年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	これまでの摂食嚥下障害の授業で学び得た知識を基に、摂食嚥下障害の問題点の抽出を学び、症例検討を通して、模擬カンファレンスでの適切な治療目標の設定、治療プログラムの計画を学ぶ。同時に食事介助や口腔ケアの手技も観察・実践する。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・疾患ごとの嚥下障害の特徴を理解できる ・各種評価結果から適切な訓練を立案できる ・自らの考えをレポートやグループワークの中で表現できる 				
テキスト・参考図書等	配布資料 嚥下障害ポケットマニュアル 第4版 著者名:聖隷嚥下チーム 発行所:医歯薬出版 病気がみえる vol.7 脳・神経 第2版 発行所:MEDIC MEDIA				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	70	<ul style="list-style-type: none"> ・定期試験 70% (筆記 50 : 実技 20) ・提出物 30% (誤字脱字に留意し、丁寧な文章を心掛けること) 		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	30			
その他	0				
履修上の留意事項	実践的な授業なので、グループワーク等積極的に参加すること				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	情報収集	全身状態、口腔の状態、栄養状態		
	2	栄養摂取方法	嚥下調整食、とろみ剤、経管栄養		
	3	病態別摂食・嚥下リハビリテーション	脳血管疾患による摂食・嚥下リハビリテーション①		
	4	病態別摂食・嚥下リハビリテーション	脳血管疾患による摂食・嚥下リハビリテーション②		
	5	病態別摂食・嚥下リハビリテーション	脳血管疾患による摂食・嚥下リハビリテーション③		
	6	病態別摂食・嚥下リハビリテーション	神経筋疾患による摂食・嚥下リハビリテーション①		
	7	病態別摂食・嚥下リハビリテーション	神経筋疾患による摂食・嚥下リハビリテーション②		
	8	病態別摂食・嚥下リハビリテーション	神経筋疾患による摂食・嚥下リハビリテーション③		
	9	病態別摂食・嚥下リハビリテーション	頭頸部腫瘍による摂食・嚥下リハビリテーション①		
	10	病態別摂食・嚥下リハビリテーション	頭頸部腫瘍による摂食・嚥下リハビリテーション②		
	11	多職種との連携	チームアプローチ・カンファレンス、リスク管理		
	12	抄読会・報告書作成	グループワークによる疾患別に依るアプローチ方法の選択		
	13	抄読会・報告書作成	グループワークによる疾患別に依るアプローチ方法の選択		
	14	食事介助と口腔ケア	食事介助		
15	食事介助と口腔ケア	口腔ケア			

授業科目	聴覚障害Ⅲ	担当教員	松山 大輔		
対象年次・学期	3年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	10回	時間数	20時間
授業目的	1,2年次で学んだ聴覚系の知識を再確認し、国家試験に出題される聴覚分野の内容を整理する。国家試験の過去問題を解けるようになり、国家試験に向けて知識を応用できる。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・耳の構造・機能を理解し、疾患と関連づけて説明できる ・聴覚障害の評価、訓練を理解し、具体的に述べるができる ・聴覚障害のコミュニケーション支援について説明できる ・補聴器・人工内耳の仕組みを理解できる 				
テキスト・参考図書等	配布資料を使用する。 (参) 言語聴覚士テキスト 第3版 医歯薬出版株式会社 (参) 日本聴覚医学会 編「聴覚検査の実際 改訂4版」(南山堂、2017) (参) 喜多村 健 編「言語聴覚士のための聴覚障害学」(医歯薬出版、2002)				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験で評価を行う		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
	その他	0			
履修上の留意事項	聴覚分野は国家試験の主要な出題分野です。重要用語や内容はしっかりおさえ得意分野にしましょう。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	聴覚障害に関わる解剖・生理	耳の発生、外耳・中耳・内耳 当該分野国家試験過去問		
	2	聴覚障害に関わる解剖・生理	聴覚伝導路・増幅 当該分野国家試験過去問		
	3	聴覚障害の疾患	難聴のタイプ、中耳炎・メニエール病・老人性難聴など 当該分野国家試験過去問		
	4	聴覚障害の疾患	遺伝性難聴 当該分野国家試験過去問		
	5	聴覚障害の評価	純音/語音聴力検査 当該分野国家試験過去問		
	6	聴覚障害の評価	インピーダンスオージオメトリー、OAE、自記オージオメトリーなど 当該分野国家試験過去問		
	7	コミュニケーションを補助するもの	補聴器 当該分野国家試験過去問		
	8	コミュニケーションを補助するもの	人工内耳、聴覚補償 当該分野国家試験過去問		
	9	視覚聴覚二重障害	盲ろう者のコミュニケーション手段		
	10	総合演習	まとめ		

授業科目	補聴器・人工内耳	担当教員	岡崎 聡子		
対象年次・学期	3年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	聴覚障害者の聴覚補償手段としての補聴器と人工内耳について理解を深める。				
到達目標	補聴器・人工内耳の基本的な構造と機能を理解し、適応や効果判定、フィッティングやマッピング、装用指導に必要な知識を習得する				
テキスト・参考図書等	講師資料を使用				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	・定期試験 100%		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	機械が苦手な人は敬遠しがちであるが、何度でも質問をして理解するように心がけること。				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	補聴器の概要	補聴器の種類と仕組み		
	2	補聴器の概要	補聴器の性能		
	3	補聴器特性装置	補聴器に関する測定、JIS、カブラの違い、実耳測定、特性装置を使った実習		
	4	補聴器特性装置	補聴器に関する測定、JIS、カブラの違い、実耳測定、特性装置を使った実習		
	5	イヤーマールド	イヤーマールドの種類、耳型採型		
	6	補聴器のフィッティング	フィッティングの考え方（リニア・ノンリニア）		
	7	補聴器のフィッティング	補聴器の適応と選択		
	8	人工内耳の概要	人工内耳の原理と仕組み		
	9	人工内耳の概要	人工内耳の音声処理方法（音声コード化法）		
	10	人工内耳の概要	人工内耳の適応基準と言語聴覚士の役割		
	11	人工内耳のマッピング	マッピングの基本操作（Tレベル、Cレベル）		
	12	人工内耳の評価	人工内耳の評価方法（成人）		
	13	人工内耳の評価	人工内耳の評価方法（小児）		
	14	補聴器・人工内耳のリハビリテーション	補聴器・人工内耳の装用指導（成人）		
15	補聴器・人工内耳のリハビリテーション	補聴器・人工内耳の装用指導（小児）			

授業科目	臨床実習Ⅲ	担当教員	北風 祐子		
対象年次・学期		必修・選択区分		単位数	
授業形態		授業回数	200回	時間数	400時間
授業目的	言語聴覚部門の管理・運営方法を理解し、多職種連携を意識しながら、言語聴覚士としての役割を学ぶ。 これまで学びえた理論や技術、臨床実習Ⅱでの経験を活用し、対象者に対して適切な評価、問題点の抽出、治療プログラムの立案・実施を行う。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・医療人としての倫理を意識しながら、関連職種との協調性を構築することができる。 ・適切な評価を取捨選択し、問題点を抽出、対象者に合ったプログラムを立案・実施できる。 ・対象者に対する適切な評価・治療を実施するだけでなく、対象者に寄り添いながら総合的な力を養うことができる。 ・臨床教育者の指導の下、適切なデイリー・報告書の作成ができる。 				
テキスト・参考図書等	特に指定しない。 特に指定しない。				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験		臨床教育者の評価と学科教員の評価を合わせて総合的に評価する。 評価項目（実習施設） 1、医療者としての資質・適性 2、信頼関係の形成 3、適切な評価の選択と実施、分析 4、訓練計画の立案と実施 5、再評価 6、研究的思考 評価項目（学校） 1、実習前準備 2、提出物 3、発表 実習施設 60%、学校 40% 200点満点中 120点以上を合格とする。		
	レポート				
	小テスト				
	提出物				
その他	100				
履修上の留意事項					
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		

授業科目	音声障害	担当教員	北風 祐子		
対象年次・学期	3年・前期	必修・選択区分	必修	単位数	
授業形態		授業回数	15回	時間数	30時間
授業目的	言語聴覚士に必要な音声障害の病態を理解し、的確な評価方法、適切な指導・訓練について学ぶ。				
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・喉頭の解剖における部位の名称と働きを説明できる。 ・呼吸生理と発声メカニズムを説明できる。 ・音声障害の発生原因および症状を説明できる。 ・評価、指導、訓練について理解する。 				
テキスト・参考図書等	(教) 言語聴覚士のための音声障害学 医歯薬出版				
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	100	定期試験で評定を行う。		
	レポート	0			
	小テスト	0			
	提出物	0			
その他	0				
履修上の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的に声を出し、自分のからだがかような風に動いているのか感じる ・配布プリントおよび教科書の予習復習をすること 				
履修主題・履修内容	回	履修主題	履修内容		
	1	声の特性と機能・調節	声に含まれる情報、声の可変性		
	2	声の特性と機能・調節	声帯振動		
	3	声の特性と機能・調節	発声の生理とその調節		
	4	声の特性と機能・調節	発声の生理とその調節		
	5	声の特性と機能・調節	グループワークを基に発声の解剖生理をまとめる		
	6	音声障害の発生メカニズムと分類	器質的病変に基づく音声障害		
	7	音声障害の発生メカニズムと分類	声帯の運動障害に基づく音声障害		
	8	音声障害の発生メカニズムと分類	その他の音声障害		
	9	音声障害の発生メカニズムと分類	グループワークを基に各病変による音声障害をまとめる		
	10	音声の検査・評価・診断	検査の種類、鑑別診断		
	11	音声障害の治療	治療法の種類、衛生指導		
	12	音声障害の治療	音声訓練の目的・種類・適応		
	13	無喉頭音声	代用音声		
	14	気管切開患者への対応	気管切開		
15	音声障害者の社会復帰	社会復帰の問題点、言語聴覚士の役割			

